高大連携による「話すこと」に着目した英語教育の実現
～留学生による参加型授業の構築～

◎光田　怜太郎（東京学芸附属高等学校英語科）
〇臼倉　美里（東京学芸大学人文社会科学系外国語・外国文化研究講座英語科教育学分野）
川手　圭一（人文社会科学系人文科学講座歴史学分野）
大野　弘（東京学芸大学附属高等学校校長）
宮城　政昭（東京学芸大学附属高等学校副校長）
小太刀　知佐（東京学芸大学附属高等学校地理歴史科）
代表者連絡先：rmitsuta@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】異文化交流 留学生 スピーキング 4技能育成　探究

１　本プロジェクトの目的

従来、中・高等学校において、特に「話すこと」の言語活動が十分に行われず、習った知識を活かしてコミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて適切に表現する機会に乏しいことはよく言われることである。とりわけ「話すこと(やりとり)」の能力を伸ばすには、実際にコミュニケーションを行う場が必要である。

このような問題意識を背景に、本校（東京学芸大学附属高等学校）は SGH-A（スーパーグローバルハイスクール・アソシエイト）の活動の一環として、1回の授業に複数の留学生を呼び、4～5人の生徒からなる班に日本語を母語としない英語話者が1人いる状況でディスカッションを行う活動を実施し、教室内でコミュニケーションの場を作り出すプロジェクトを展開した。本プロジェクトは大学（東京学芸大学）と連携を取り、その展開方法の開発と、生徒の英語を話すことの自己評価の変化と追跡することを狙ったものである。

また、特に平成30年度では英語で探究活動を行うことを選択した生徒に対しても留学生の支援を活用した。

２　本プロジェクトの実施

本校にて2年次において生徒全員が履修する「英語表現 II」の授業において 10 名程度の留学生（大学生や教員研修生）を年5回程度招き、対話中心のアクティブラーニングの機会を提供した。生徒たちは普段の「コミュニケーション英語 II」や「英語表現 II」の授業で学んだスキルを活用して、留学生に日本文化を紹介したり、身近な話題から社会的な問題についてディスカッションをしたりすることを通して，英語による発信力および対話力を鍛える授業に臨んだ。

このプロジェクトでは冒頭に挙げた課題の解決に向け、大学との連携を重視した。実際に留学生が足を運び、授業が展開されるのは高校の現場であるが、大学の国際課には留学生の派遣を依頼し、また英語教育の研究室には授業への助言やデータ分析などを依頼し、授業改善を狙った。

授業の日取りが決まったら大学に留学生の派遣の依頼をした。派遣される留学生の出身国は様々で、非ネイティブスピーカーが多く、アジア系、ムスリム系など様々なバックグラウンドをもった留学生と英語を通してコミュニケーションを取ることは、生徒にとって大きな刺激となった。

平成 29 年度と平成 30 年度において、それぞれ年 5 回留学生を招聘する授業を実施し、それぞれの回について共通の内容の授業を行った。

1 回目は各生徒および留学生が自分の名前の由来について説明する授業を行った。全生徒が順番に英語を話す機会が得られること、および名前の命名についても各出身国の文化背景を知る異文化理解学習の機会となった。

2 回目は外国人からみて不思議に思える日本人の習慣についての文章を読み、それを自分の言葉で言い換え説明し（リテリング）、その上で意見交換をする活動を行った。理解したことを英語で伝える練習と外国から見た日本を知る機会とした。

3 回目は留学生の出身国について質問して、また留学生から日本について質問するという活動を行った。その場で相手に対する質問を考えたり、突然された質問に答えたりするという点で、やりとりの力がより一層求められるのだが、トピックとしては取り組みやすく、生徒にとって気軽に話せるようであった。

4 回目は時事問題についてやや難しい内容について話し合う。平成 29 年度は学校における頭髪やテレビにおいて肌の色を黒くする芸風について扱い、平成 30 年度は歩きスマホに対する問題について考え意見を述べた。

5 回目は「世界平和に向けて何ができるか」という内容で作文課題を事前に課し、各生徒が持ち寄ったアイディアをグループで共有したうえで、グループとしての 1 つのキーワードを作り上げた。各生徒がじっくり考えてきた内容について、当日ディスカッションをし、グループとしてのアイディアをまとめる共同活動であった。

これら 5 回の活動のうち第 2 回・第 5 回は事前課題があり、それ以外は当日与えられた話題に即興的に話す活動である。これらをバランスよく配置し、よく考えた話題について話す力とその場で思ったことを言語化する力の両面の育成を狙った。

このように、それぞれの回にはトピックがあり、毎回の狙いは存在するが、特に重視したいのは回数を重ねて会話力を徐々に鍛えていくことであった。そのため、毎回行っている自分の英語を話すことについての自己評価の変化を追跡調査し、生徒の変容を観察することを本研究の重要な位置付けとした。

また、本校が実施している探究活動（2 年次における学校設定科目「SSH 探究」）において英語で成果物（論文）を出すことを選んだ 10 名程度の生徒を対象に、ポスタープレゼンテーションや口頭発表にて、留学生に対し説明し質疑応答を行う活動を行った。これにより、英語による説明をしっ

かり準備し、かつその場で英語質問に答えなければならないことで、モチベーションおよび達成感は相当高くなった。

３　成果と課題

生徒の変容を測るため、毎回の授業後にルーブリックによる自己評価と、英語を使うこと等についての意識を尋ねるアンケートを実施した。

ルーブリックは「コミュニケーションの展開」「話すこと」「聞くこと」「インタラクション」の４つの項目から構成されている。インタラクションの項目は平成 30 年度第 4 回から設けており、それを除いた２ヶ年の初回と最終回の変化は次の通りになる。各評価記述は省略するが「4」が高評価で「1」が低評価である。

	平成 29 年度　第 1 回		平成 29 年度　第 5 回	
項目	平均(SD)	人数	平均(SD)	人数
コミュニケーション	2.06(0.92)	302	2.69 (0.85)	302
話すこと	2.09(0.80)	302	2.60 (0.83)	302
聞くこと	2.32(0.82)	302	2.86 (0.81)	302

	平成 30 年度　第 1 回		平成 30 年度　第 5 回	
項目	平均(SD)	人数	平均(SD)	人数
コミュニケーション	2.70(0.92)	284	2.80 (0.85)	283
話すこと	2.58(0.80)	284	2.64 (0.83)	284
聞くこと	2.88(0.82)	284	2.86 (0.81)	284

平成 29 年度では、各項目の伸びに有意な差（中程度の効果量）が見られるが、平成 30 年度では各項目の伸びに統計的に有意な差は見られなかった。「コミュニケーション」と「話すこと」の項目については，平成 30 年度も記述統計上は伸びが見られるが，これが統計的に有意な差とならなかった理由の一つとして，第 1 回の自己評価が平成 29 年度と比べて高かったことが挙げられる。「聞くこと」については、両年度とも他の項目より高いことが伺える。受信と発信という観点から見ると、発信の方が自己評価が低いことが垣間見れる。「インタラクション」の項目は、話し相手を意識した自己評価を行うという観点から平成 30 年度第 4 回より新設された。続く第 5 回との比較は次のようになる。この伸びについては統計的に有意な差（効果量小）が見られたが、第 4 回は難易度が高く、自己評価は低めであること（後述）からさらなる検証が必要である。

	平成 30 年度　第 4 回		平成 30 年度　第 5 回	
項目	平均(SD)	人数	平均(SD)	人数
インタラクション	2.33(0.90)	267	2.56 (0.93)	284

アンケートは第1回と第4回に実施した。質問は「①『外国語』を話すこと」に対してあなたの意欲はどの程度ありますか？」「②母国語以外に外国語を身につけることは、これから自身にとって必要になると思いまか？」「③今日実施した留学生との授業を通じて、『英語を話すこと』に対する自己評価はどうですか？」「④実際に正規授業のなかで、外国人のスタッフと外国語で話すことは必要だと思いますか？」の4項目で「5」が肯定的な回答、「1」が否定的な回答になる。

	平成29年度　第1回		平成29年度　第4回	
項目	平均(SD)	人数	平均(SD)	人数
①意欲	3.45(1.41)	331	3.19(1.42)	331
②必要性	4.14(1.32)	331	3.81(1.54)	331
③自己評価	2.75(1.21)	331	2.47(1.32)	331
④授業必要性	3.85(1.31)	296	4.02(0.87)	296

	平成30年度　第1回		平成30年度　第4回	
項目	平均(SD)	人数	平均(SD)	人数
①意欲	3.77(1.01)	231	3.44(0.99)	231
②必要性	4.20(0.95)	231	3.86(0.99)	231
③自己評価	2.97(1.07)	231	2.72(0.98)	231
④授業必要性	4.05(0.91)	231	3.66(1.05)	231

アンケートの回答については、平成29年度④「授業必要性」を除き、後に行った調査の方が意欲が下がっているような結果になった。(これら8つの項目において有意な差(効果量小)がみられた。)これは、③「自己評価」が下がっている点など、前述のルーブリックでの年間を通した傾向と一致しないことから、第4回で扱う内容が難しく、この回で達成感が得られにくかったことなどの原因が考えられる。

自由記述では「最初は苦手意識が大きく、あまり積極的に話すことができなかったが、回を重ねるごとにだんだんと自分から質問したり、臨機応変に対応したりできるようになって英語でのコミュニケーションの楽しさを学ぶことができたと思う。」という旨の回答が複数見られた。

このような生徒の声を活かした授業を今後も展開していきたい。今後も授業研究を継続し、大学では高校の授業に参加した学生に対して単位認定を行うなど、この形態の授業が恒常的に実施できるシステムの構築が望まれる。